

Henry van Dykeにおける〈詩情〉*

—van Dyke 対 Novalis—

三 根 利 夫

The Spirit of Poetry in Henry van Dyke

—van Dyke v. Novalis—

By

Toshio MINE

I have to admit that Henry van Dyke is a minor figure in American literature, yet it will not be just not to admit that the very few have had as many-sided and eminent abilities as Henry van Dyke. Having been tired of Romanticism, the Americans began to follow Realism right after the Civil War, but van Dyke found real beauty and uninfected 'man' in nature. I see deeper significance in the fact that he did not find satisfaction in mere historical Romanticism but that he did find deep contentment in honest childlike nature of man before God, discovering the way for expressing freeness of spirit in the 'spirit of poetry', not limited by time nor space.

There is no question that he is a poet, and an exceeding one, but we find him having lived a life of 'a child of God' and that he was always a Christian before a poet. His poetry is the natural utterance of his faith, not formulated in the framework of literature but it is just the 'exhaust' of his life itself, the life devotional and poetic. His poetry is the very product of his total existence. We can hear anthem of a devout soul everywhere in his works. We can feel pulses of adoration and consecration in his literature which is 'only secondary to life.'

That his solid faith, though somewhat obdurate, has given unity to his work and his character is the very fact that attracts me most.

* 水産大学校研究業績 第491号, 1967年1月31日 受理
Contribution from the Shimonoseki University of Fisheries, No. 491
Received Jan. 31, 1967

I

“The Blue Flower which the old German poet and philosopher, Novalis, used in his romace of Heinrich von Ofterdingen to symbolise poetry, the object of his young hero’s quest, I have used to signify happiness, the satisfaction of the heart. My wish is that the Blue Flower may grow in the garden where you work.”

「ドイツの詩人であり、哲学者である、かのノヴァリスが、詩を象徴するために、ハインリッヒ・フォン・オフトルディングンという彼のロマンス文学の中で用いた〈青い花〉すなわち、その若い主人公が追い求めた対象を、私は幸福、心の満足を象徴するために用いた。私の願いは、その〈青い花〉が、あなたがたの働きの場の花園に成長するようにということである」という van Dyke の短篇集 “The Blue Flower” の Preface のこの言葉は、かれの意味する 〈青い花〉 をよく描写しているものだと思うので、私はあえてこれを文頭に引用した。

van Dyke は確かにアメリカ文学史中の minor poets の一人と言えよう。同じ民衆詩人でも、Carl Sandburg のように、詩人としては大成しなかったが、非常に広い分野で、かれほど積極的に情熱を傾け、幾世代にもわたって広い階層の人々に、負担を感じさせずにその作品を読ませ、多くの人に愛された人も少ないと思うので、詩人 van Dyke の詩人たるゆえんを考察してみることも、文学史上 apologia としての意義があると思う。

読者に負担を感じさせなかったというのは、かれがあまりにも、いわゆる詩人らしからぬ詩人であったからである。教育家の眼には、詩を書くいま一人の教師として映り、釣り人には、大きな長靴をはいて谷川で無心に糸を垂れる釣り仲間として受け入れられたのである。

かれの、おそろしく多面的な生活は、その職歴を見ても明白である。長老派の牧師として終始、精力的に活躍し、毎日曜の礼拝説教は、常に選ばれ抜かれた語彙の集積の芸術であった。“The Story of The Other Wise Man” (1896年) や “The First Christmas Tree” (1897年) は、いずれも Brick Presbyterian Church, N.Y. のクリスマス礼拝説教としてかれが書いた物語りで、信仰的にいきいきとした、かつ、芸術の香り高いこれらの作品は、けっして〈作られた〉ものではなく〈生れた〉ものである。真の説教は、たくみに組み立てられたものではなく、肥沃な土壌からおい立つものなのであると同様、真の芸術も生れ出るものなのである。

長老教会の記録によれば、教義の成文化に際して van Dyke は行動的に主導権を執り、急進的科学家の動きに対しては、保守的意見を積極的に主張し、長老教会内での保守派の旗頭の一人になり活躍したことが明らかである。当時の米国社会および教会を風靡していた materialism や rationalism に激しく抗し “The Doctrine of Reprobation” に反対して1890年の New York Presbytery で発言して言った；

“Is this Calvinism or Christianity measuring the mind of God by the logic of the seventeenth century?”

概して、余りにも神学的であるがゆえに、その最も悪い点である「冷たさ」の代表のように言われる長老派の教会の中であって、詩人の暖かさを持つ van Dyke が rationalism に走る教会を傍観するに忍びなかったということは1884年に書かれた “The Reality of Religion” の序にも明らかである。

“We do not sneer at the dogmas of theology. They are certainly as important as the dogmas of science. We do not despise the questions of ritual. They are at least

of equal consequence with the questions of social order. But religion is infinitely beyond all these. It is more vital and more profound. It does not appeal to the intellect alone. It is not satisfied with the conclusions of logic. Nor does it rest at ease upon the aesthetic sense. It reaches down into the very depths of the living, throbbing human heart, and stirs a longing which nothing outward and formal can ever still, — the longing for personal fellowship with God.”

また1896年に書いた“The Gospel for an Age of Doubt”は上記の告白を発展解明している。

1899年にプリンストン大学の教授に就任して以来、1923年に71才で現役の教師の地位を退くまで教鞭をはなさなかつたかれは1912年には60才で The National Institute of Arts and Letters の総長となり、1920年には来日し、東京帝国大学にて“詩と愛国心”と題して講義をしたこともあった。

“I love thine island seas, Thy groves of giant trees,…”

という有名な詩“America”を書き、

“I know that Europe’s wonderful, yet something seems to lack. The past is too much with her, and the people looking back. But the glory of the present is to make the Future free,…”

We love our land for what she is and what she is to be.”

と“America for Me”の中で述べた愛国家であり、政治家であるかれは、Woodrow Wilson にオランダおよびルクセンブルグの大使に任ぜられ、第一次世界大戦が起こるや、行動的な熱情を押さえきれず、中立国の大使の任を辞し、米国海軍従軍牧師としてヨーロッパ戦線の兵士の心のささえとなって活躍した。

このような曲折に満ちたかれの職歴は、そのままかれの性格の多面性を物語っていると思うし、そのどの分野においても秀でた才を示し得たということはかれの非凡性を如実に示すものだと思う。

II

このような〈many-sided life〉があらゆる階層、あらゆる職業の人々に対するアピールの源泉の一つであったことは疑問の余地がないとしても、かれの詩が大衆に暗誦され、大衆が作者の名を知らぬままにその詩の数々を愛したのは、彼のいわば泥臭いまでの人間性のゆえもあろうし、また「Keatsの詩のように絵画的で、Tennysonのように音楽的で、英訳聖書のように美しい」かれの詩自体の魅力も大きかろう。かれの詩集が版を重ねていることはその詩が多くの人に読まれたことを示すし、現在でも、

“Joyful, joyful, we adore Thee, God of glory, Lord of Love…”

という詩はベートーベンの曲をつけて世界中の教会で歌われている。

外交官・大学教授・牧師、とかれの肩書のどれを取り上げてもいかめしいはずの van Dyke とは実はフランネルのチェックのシャツと詰め綿のしてあるゆつたりした靴でくつろぐことを最も愛し、寸暇を見てはニューヨークの北部の溪流に釣糸をたれて遊んだのだった。かれにとって、詩は、文学は生きること自体であった。詩を「最もすぐれた表現方式」と考えた van Dyke は生活を忠実に詩に写したとも言える。技巧的に組み立てられた文字の集積は、どのように文学的に洗練された輝きを持っていても、かれにとっては意味がなかつた。だから、かれの作品の一つ一つは、かれの生活の排気にすぎなかつた。文学のために人間生活を犠牲にしたり、犠牲にまではせずとも、人間生活が創作活動に従属することは首尾転倒もはなはだしく、かれにとっては異端としか映らなかつた。“The Van Dyke Book”の中で Trinity College の英文学教授 Edwin Mims は、

“Few men have finer appreciation of literature, but he knows that it is but secondary to life.”

と言っている。

van Dyke にとって最もたいせつなことは、神の子としての人間の生活の態度だった。Mims は“かれのあらゆる性格の上に冠たるものは、キリスト教の力強い信仰であり、その信仰がかれの性格と作品とに統一を与えている”(Van Dyke Book) と言う。事実かれの作品のどれを採り上げてみても信仰の賛歌が聞こえて来るのである。かれにとって、テクニックよりも<詩の心>がたいせつだった。その思想の深みは一般の人に理解されることがあっても、幼な子ですら、作品に触れることにより、それなりに作者の<詩の心>には触れられるのである。そして幼な子こそかれの意図した内面的な幸福の秘密を見たのである。天衣無縫な純心さは自然の美のように、読者を暖かく包まずにはおかない。1895年に出版された outdoor essay “Little Rivers” の最初の章は、かれの意図が直截に出ていておもしろい。

“You shall not be deceived in this book. It is nothing but a handful of rustic variations on the old tune of ‘Rest and be thankful’, a record of unconventional travel, a pilgrim’s scrip with a few bits of blue-sky philosophy in it. There is, so far as I know, very little useful information and absolutely no criticism of the universe to be found in this volume....

But if you care for plain pleasures, and informal company, and friendly observations on men and things, (and a few true fish-stories,) then perhaps you may find something here not unworthy your perusal. And so I wish that your winter fire may burn clear and bright while you read these pages; and that the summer days may be fair, and the fish may rise merrily to your fly, whenever you follow one of these little rivers.”

Brook van Dyke は、父 Henry van Dyke について “The Van Dyke Book” で、こどもの目からという角度で論じているが、van Dyke 研究の上で貴重な資料でもあり、興味深くもある。複雑なキリスト教教義を論じ、Tennyson の詩を講義する van Dyke が、こどもにせがまれて食後の一時に話す物語がこどもの心を捕らえたというのは、かれが<詩の心>に生きていたからである。Brook van Dyke は父をしのびつつ言う。

“We preferred the story of ‘The Little Girl in the Well’ and ‘Tommy Lizard and Frankie Frog’ and other wonderful tales that he invented and told us between supper and bed time.” (“Story of The Author’s Life from A Child’s Point of View”)

II

ある人は van Dyke の <minor poet> たるゆえんは、かれの作品が<説教>であって文学ではないと言うかも知れない。しかし van Dyke にとって、信仰は人生のすべてであった。そしてそのような生活の中から生まれて来る心の正直な産物はきわめて信仰的であってけだし当然であろうし、もしかりに、かれの作品が信仰の色濃いものであれば、それは虚偽である。ここで逆説的な論理の展開が許されるならば、まったく信仰的な動機から、信仰的目的で書かれた聖書を信仰から切り離して純粹に文学的に——その言葉自体に問題があるのだが——鑑賞することは不可能なのである。それは聖書の文学性を否定するのではなく、か

えって聖書の真の文学的な美しさは、その動機と目的の理解と〈同情〉を内包するときに鑑賞されるということの主張にはかならない。

“特定の作品を引用してもその作品の中に作者が溶け込んでいるとは言えない”と C.S. Lewis は言うが、信仰的という言葉で、単に引用と結びつけるのも早急すぎて当てはまらないということも、この種の文学作品の鑑賞には欠くことのできない重要な鍵だと思う。

もつとも、Tennyson の詩を愛した van Dyke も Tennyson 同様「詩か感想録かわからぬ物」（『英文学史』齊藤勇）を書いたし、理屈っぽくて興味をそぐようなところもあることも事実である。元来、〈詩想〉と散文精神とは隔たりのあるものであるから、詩人が散文的な理論に首を突っ込んでも、それは所詮下手な理屈であり、自らの表現においても、他の説得においても不完全きまわりないのはけだし当然であろう。

詩は生命の感動の発露が「それにふさわしい言語をもって表現せられたものである」（『詩の観念について』賀川豊彦）とすれば、詩と宗教的信仰とが強く結びつくことは観念的にも理解に難くない。実際に筆を執って詩を書かなくても〈詩情〉あるいは〈歌ごころ〉を忘れてしまう宗教的信仰は想像出来ないし、また反面、詩人もその心の奥底には、秘めた〈願い〉を持っているものであり、他のだれにもその〈青い花〉を侵すことを許さないものなのである。宗教的信仰は全人的（total existence）な感動であるから、信仰生活の中からの叫びはきわめて感動的であり、したがって、きわめて詩的である。詩篇におけるダビデの賛歌はみがき上げられた詩想であるし、エレミヤが荒廃したエルサレムを眺望して、

“ああ哀しいかな、むかしは人の満ちたりし此の都邑、いまは凄しき様にて坐し、やもめの如くになれり”

と歌うとき、それは詩以外のどのような形も採りえない。極度に熟した想念は散文的でありえない。たとい、散文形態であってもその中に詩想が派打っている。その詩想があるときは社会運動のごとき実践の中にすら観察されることもあるし、その詩想こそが生活の実践の中に夢をもたらせてくれているのである。したがって世には、詩人ではないが詩人的資質を豊かに持ち合わせ、生活の諸場面に詩想がみなぎっているような、詩人にあらずる詩人もあり、反対に、幾多の詩の労作を積み重ねてもその人の本来の生活が詩の心とは、はるかにかけ離れた、むしろ散文的な資質の持ち主も見かけるのである。賀川豊彦も、もちろん文人ではなく、その詩作は、必ずしも専門家の評論に値するものだと思わないが、かれの生活が現実社会に密着していて、かれの想念も文学的な造形という形で表現できなかつたという理由だけで、賀川を詩人の列からははずすことには納得がゆかないものである。

多くの賛美歌を作り、生前5冊の詩集を刊行し、死に至るまで詩作に従事した賀川を武藤富男は“賀川豊彦全集”で次のように論じている。

「此の詩想が社会的に発現すれば、それは彼の企画となり事業となつた。奇想天外なるアイデアを彼は創作した。また人の思いを超える事業を案出した。俗世界における俗なる事業といえども、彼の詩想のあらわれでないものはなかつた。まして愛の実践としての事業においては、彼の中には次から次へと着想が浮かび、人と場所さえ見つければ、資金を作つてこれを与え、その実現をはかつた。育児院然り、託児所然り、幼稚園然り、診療所然り、教会然り、学校然り、その他もろもろの社会事業、平和事業において然りである。まことにこれらは彼の作つた〈表象の詩〉であつた」

わき道にそれる感もあるが、日本国内のみならず、世界の賀川として有名なこの伝道者の詩的生活が、詩と宗教的信仰の関係という点で van Dyke 研究に興味ある関係を含むと思われるので、あえて賀川論にそれようと思うのであるが、説教や信仰告白に現われている賀川の信仰の姿勢が、神学者のそれとは、はなはだしく異なり、むしろ詩人の姿勢であることに気付くときに、この人が詩人としての生活に終始したことを受け入れるのには何らの抵抗も感じないのだと思う。賀川は、イエスの贖罪という神学的難関を説くときにも神学的解説というよりは詩人の切なるおmoiをもつて聞く人々の心に直接働きかけることにより、大きな

伝道成果を収めえたのである。賀川は言う、

「あの悲劇こそイエスの心理に徹し得たパウロのみが説き得たものではなからうか。——こんなにして、私はパウロを通じてイエスに満足する。そして、悲劇の主人公イエスに満腔の同情と同感を現わす。イエスの死は誠に救済者の死である。神の子の死である」(“人間苦と人間建築”)

そこには、キリスト論も救いの神学もないと言つてもよからう。賀川が説いたのは、賀川の心に描かれたイエス像の追求であり、発表の形式は素朴にして単純な、しかも切なる〈詩〉であると言えよう。

IV

van Dyke が文学のテクニク面よりも精神面に重きを置き、文学を人生の第二次的な存在であると見生活の中にこそ〈詩歌〉の根源を求めた点において、前述の、賀川に関連した詩論との調和が見られると思う。Romanticism が機械的法則や因襲より、自由、驚歎、自我の表現、個性の勝利への解決であり「理智に対する情意の反抗である」(“英文学史”齊藤勇, p.304) とすれば、van Dyke を Romanticism の流れの中に見出せるであろうし、そうであるという推論を受け入れるのになんら抵抗を感じるものではないが、一作家を〈ローマン的〉とか〈抒情的〉とかいうわくにはめ込むことが、詩を、詩人を理解する手段だという風に、あるいは、そうしなければ理解できないかのようにみることは当たらない。詩人の発想を来たらしめる背後の条件関係を〈愛情をもって〉理解しようとせず、かえって無視して、表面化した結果のみを機械的に分類しても、それは学問的であると言えるかも知れないが、詩的ではあるまい。詩が形式ではなく、その基底を流れる〈詩情〉であるという立場をとるとすれば、なおさら〈分類学者〉と詩人との隔差は大きくなり、埋める術も見出せなく、実に無関係な二者が平行線的に通過して、第三者にとってはまったく意味を失するのである。

オーソドックスなキリスト教徒として〈内なる人〉に興味を持った van Dyke の心の動きは理解に難くない。物質主義に走り、合理主義に溺れていた当時のキリスト教会に対して〈内にひそむおmoi〉に生きていた van Dyke は幾度となく警告を発した。

“The logic of rationalism is applied to its own premisses in order to show that they are unfounded and unverifiable. The result of this attack, as it has been made with a relentless and masterly hand by Mr. Athur James Balfour in his Defence of Philosophic Doubt, is to exhibit the startling fact that ‘the universe as represented to us by science is wholly unimaginable, and that our conception of it is what in Theology would be termed purely anthropomorphic.’ The evidence for the existence of a world composed of atoms and ether is no more conclusive, the account which science gives of their nature and qualities is no more coherent, than the evidence and account which faith gives of a world created by a personal God and inhabited by immortal souls. Pure agnosticism is thus forced into the service of Christianity and used to destroy all a priori objections to it. Giant Doubt is brought low by turning his own weapons against himself, even as Benaiah, the son of Jehoiada, slew the Egyptian *with his own spear.*” (“The Gospel for an Age of Doubt”)

極度に進んだ都会生活の合理性の中に失われて行く人間性を自然の中に求めたかれの見た真の人間性は自然の中のそれ以外の何物でもなかった。かれが興味を持っていたのは、自然そのものではなかった。だからかれの作品には自然への逃避は見られない。かれの賛美する自然は、失われつつある人間性との関連におけ

るそれである。“Fisherman’s Luck” や “Little Rivers” はその点をよく説明している。科学が人間社会を自然から隔離する方向に向かい、人間が自然との交わりを拒絶するがゆえに、自らの能力を過信している状態は、神の業としての人間、自然を愛する van Dyke にとっては冒瀆的に思えた。使徒パウロが、当時の知識人の最高の水準の中ですらひいでていたにもかかわらず〈宣教の愚か〉をもって教えたごとく、van Dyke も自らの〈小ささ〉を自然の大きさに映して言う、

“We think we know a great deal more about the processes and laws and conditions of life than men used to know. And probably that is true; though it is not quite certain, for it is hard to say precisely how much those inscrutable old Egyptians and Hebrews and Chaldaeans and Hindus knew and did not tell.” (Preface, “The Unknown Quantity”)

また、われわれの知識の進歩がまさに牛歩のごとく、その結果は微々たるものであると次のように言う、

“But granting that we have gone beyond them, we have not gone very far, we have not come to perfect knowledge. There is still something around us and within that baffles and surprises us.” (Preface, “The Unknown Quantity”)

人が自らの〈小ささ〉を知るときこそ〈奇蹟〉は起こりうる余地を見出すし、真の芸術は存在する。光線が常に直進しなければならないという既成観念の中には新聞の報道記事があっても詩の香りはない。〈遠見の岩〉と称する岩の上に登ると地平線の向こうの景色が手に取るように見えてきても不思議はない。小説 “Spy Rock” の中で Keene は言う、

“Who can prove that *a ray of light* may not be curved, under certain conditions, or refracted in some places in a way that is not possible elsewhere? I tell you there is something extraordinary about this Spy Rock. It is a seat of power — Nature’s observatory. More things are visible here than anywhere else — more than I have told you yet.” (“Spy Rock” p. 116, イタリックは筆者)

詩人は、そのような〈非常識〉の世界にさまよう特権を持つ。常識の制限の中に生きられないことがかれを詩人にする。ノヴェリスに言わせれば「全て詩的なものは童話的でなければならぬ」のである。視覚が可視光線だけに対する反応を意味せず、〈未知数の光線〉への反応であっても不思議はない。Keene は言う、

“I can see, not by the light-rays only, but by the rays which are colourless, imperceptible, irresistible — the rays of the unknown quantity, which penetrate everywhere.” (“Spy Rock”)

理性主義、合理主義の風靡する当時のアメリカの社会にあつて、詩人牧師 van Dyke は、視覚によらねば、そして物質的に証明できなければ実存しないという〈科学的信仰〉に反ばつしなければならなかった。“Spy Rock” の Keene の言葉をもう一度かりよう、

“How was such a man to be brought back to the real life whose first condition is the acceptance of a limited outlook, the willingness to live by trust as much as by sight, the power of finding joy and peace in the things that we feel are the

best, even though we cannot prove them nor explain them? How could he ever bring anything but discord and sorrow to those who were bound to him?"

精神の力が世界を自由に変容させるという〈魔術的観念論〉と称するノヴァリスの詩心に van Dyke がひかれたのは十分理解できる。一部の宗教的信仰者がするように、肉体の限定された世界から精神界へ逃避するのではなく、精神の力を信じ、自由に駆使し、無限にその力を拡大し、apply することにより、自分の生活環境を完全に支配することを意味するのである。そこには、自然の法則による束縛は存在しない。無限に変転自在であり、真の自由が存在する。その意味で、形式上のあらゆる規制をこえているので、ローマン的であると言えよう。

詩人が、真の美しさを求めるならば、一本の草花にも全宇宙の美しさと優しさを見ることができるのであろうし、黙って坐っているだけで、世界を全身に感ずることができよう。

“星があんなに美しいのも
目に見えない花が一つあるからだよ
砂山の上に腰をおろす。
何も見えません。
何もきこえません。
だけど何かが、ひっそりと光っているのです……
家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないのさ”

と Antoine de Saint-Exupéry は“Le Petit Prince”の中で言う。(内藤濯訳による)

ノヴァリスの“青い花”は、このような〈詩〉の礼賛がそのテーマとなつたローマン主義的なかれの世界観の表現である。主人公ハインリッヒは夢で〈青い花〉を見て強くそれにあこがれ、ひかれて、これを探求して流浪し、ついにそれを発見するのであるが、その花こそが〈愛〉であり〈詩心〉であつた。ノヴァリスにとって、

“愛は最高の実在であり、太源である”(“断章”より)

愛の体験こそ人間性の深さを得る方法だったのである。かれの人生の方向を決定した、当時十三才だったゾフィーを熱愛し、ゾフィーが十六才でこの世を去るや、ますます熱愛の度を加え、ゾフィーも聖母マリアも同一視するほどまでにゾフィー信奉に燃えたノヴァリスは、それから四年たった三月に生命の力を文字どおり燃しつくして死んで行つたのであるから、かれが、愛がすべての根源であると言ってもまったく矛盾はない。しかし、van Dyke はノヴァリスの詩心をこそ愛せ、かれのような神秘経験を持たず、また愛が最終的な実存であるとは信じていないのだから、ノヴァリスの憧憬した〈愛〉を人間生活の労作の一部としてしか見なかつた。van Dyke にとって興味あるものは、ハインリッヒの恋愛経験ではなく、inward happiness を求めて遍歴する人生の道そのものである。van Dyke は“Blue Flower”の序で次のように言う、

“It is the idea of the search for inward happiness, which all men who are really alive are following, along what various paths, and with what different fortunes!”

van Dyke に関する限り、ノヴァリスの“青い花”の英訳のみを独立して見ても意味がない。また興味もない。(事実、それは原文のほんの一部にすぎない) 短篇集“The Blue Flower”の序の働きをしているということで意味も興味もあり、作者の意図も全体との関連でのみ明らかになる。それはちょうどミルトンの“樂園喪失”が部分的章節においては感動的ではないが、全体を貫流するカルヴィン主義的、栄光賛美的の根本思想が感動的であると同様である。もつともこれは、作者ミルトンと同じ信仰的体験の上でのみ、

作品のより良い理解が可能であるという主張に立つての発言であるのだが。

V

以上のように、ノヴァリスと van Dyke には大きな相違があるのだが、“青い花”における両者の共通点はその主人公が〈青い花〉へ抱く憧憬の念が観念操作による単なる抽象的結果ではなく、〈青い花〉との出会いが、一人の少年の人生を新旧二つの世界に分けてしまうほどの実存性を持っているという点であろう。両者にとって〈思う〉ことは〈触れる〉ことと同じレベルの〈動作〉であり、生活の方向を決定づけるのにまったく十分なまでに、生命の根源に支配力を持っている。〈思う〉ことは〈感触〉よりもむしろより強力に生命を支配し、それはより重要な人生の tool であり、高度な人間生活の pattern なのである。

南北戦争後のアメリカが Romanticism から Realism へと流れて行く中で、失われて行く〈詩情〉を求めて、あまりにも〈散文的〉な引力の法則も、因果の法則も退けて、精神の自由性にあこがれ、魂が渴望するものが成就するという奇跡の可能性をいっばいにはらんで〈童話的〉なものに〈詩〉の真髄を見ようとした van Dyke が、ノヴァリスに瀟々たる憧憬と同情を持ったことはうなずけるのである。

年譜 (Henry van Dyke とその周辺)

- 1852年11月10日 Philadelphia 市 Germantown に生れる。父は Rev. Henry Jackson van Dyke,
The First Presbyterian Church of Germantown.
- 1853年 Brooklyn に移住
- 1854年 (Thoreau: “Walden”)
- 1855年 (Longfellow: “Hiawatha”) (Whitman: “Leaves of Grass”)
- 1863年 (Lincoln’s Gettysburg Address) Henry van Dyke は11才
- 1873年 Princeton University より A.B. を受ける (21才)
(Mark Twain and C.D.Warner: “The Gilded Age”)
- 1875年 (Henry James: “A Passionate Pilgrim”)
- 1877年 Princeton Theological Seminary 卒業
- 1878年 ヨーロッパへ渡り、Berlin で学ぶ
- 1879年 United Congregational Church, Newport, R.I. の牧師として就任
- 1881年 BaltimoreのEllen Reid と結婚
- 1883年 Brick Presbyterian Church, N.T. に就任。ここで彼の説教が有名になる。
- 1884年 処女作“The Reality of Religion” 出版
(Mark Twain: “Adventures of Huckleberry Finn”)
- 1889年 “The Poetry of Tennyson”
- 1892年 (Alfred Lord Tennyson 死す)
- 1895年 “Little Rivers”
- 1896年 “The Gospel for an Age of Doubt” “The Story of The Other Wise Man”
- 1897年 “The First Christmas Tree”
- 1898年 (Spanish-American War)
- 1899年 “Fisherman’s Luck”
Murray Professor of English Literature of Princeton University になる。
- 1900年 Avalon に移住
- 1901年 “The Ruling Passion”
- 1902年 “The Blue Flower”
- 1907年 “Days Off” (essay)

- 1908年 “Out of Doors in the Hollyland” (essay)
1910年 “The Spirit of America” (essay)
1912年 “The Unknown Quantity”
The National Institute of Arts and Letters のPresident となる。
1913年 Woodrow Wilson により the Netherlands と Luxembourg の大使に任ぜられる。
1916年 同大使を辞任する。(Sandburg: “Chicago Poems”)
1917年 フランスの戦線を訪問
Lieutenant Commander in the Chaplain Corps of the U.S. Navy になる。
(T.S.Eliot: “Prufrock, and Other Poems”)
1919年 Princeton に帰る。
フランス政府より the Cross of the Legion of Honor を贈られる。
Oxford University より D.C.L. degree が贈られる。
1920年 来日し東京帝国大学にて<詩と愛国心>と題して講義
1922年 (T.S. Eliot: “The Waste Land”)
1923年 教師生活から引退
1931年 Golden Wedding Anniversary
1933年 4月10日, Avalon の自宅にて死去。当年81才。